

旅立ちの前に
後輩たちへ

SAKURA



感動体験作文 印象的な作品☆

本当は、もっと早くに発表したかったのですが卒業式当日になってしまいました。全校生徒の作品提出を待ってリストを作りたいと思っていましたが、残念ながらそれは実現できませんでした。しかし！すてきな作文がいくつもあって選考に悩みました。心が動いた選り抜きの3年生の作品8編を紹介します。 **さすが、「ピカイチ」の3年生です。ご卒業おめでとう！**

「暗闇の中の輝き」

伊藤さん

この夏、自分が住んでいる国でオリンピックが開催されました。自分自身がオリンピックにとっても興味があったので、毎日勉強の合間にテレビで観ていました。いろんな競技でいろんな感動の瞬間があった中、私が特に感動した競技はソフトボールでした。ソフトボールは、2008年の北京大会を最後に競技の項目から外され、時を超えついに、2020年(2021)の東京大会で競技として追加されました。1試合目から勝ち進んでいき、決勝戦で因縁の相手であるアメリカとの対決になりました。序盤は点が入らず、流れがどんどんアメリカに傾きかけている中、投手・野手のファインプレーで流れをつかみ、その後点をとり、結果2-0で日本が勝利し、金メダルをつかみ取りました。流れをつかむきっかけとなったファインプレーの中で、一番感動したのは6回裏の1アウト、1,2塁のダブルプレーです。あわやタイムリーかと思われた打球がサードの手を弾き、それをノーバウンドでショートが取り、ランナーが飛び出していたので2塁に投げダブルプレー。

この瞬間私は、あきらめずに自分が最大限できるプレーをすることによって、それが起爆剤となり少しでも勝利に近づくことを改めて実感しました。私は部活動でなかなか結果が出ず苦しんでいました。でも練習はどんなにきついても辛くても、決して投げ出すことはありませんでした。なぜなら私は、必ず結果がついてくると信じていたからです。その結果、3年生最後の大会で好成績を残すことができました。どの競技の選手もそうですが、「最高の舞台」に来るまでに計り知れないほどの努力をしてきているはず。「最高の結果を残すために」「あの人のために」など目標をもち、その結果が感動を生み出したのかなと思います。「人生あきらめずに努力をすれば良い結果が待っている」この言葉をいつまでも心に抱きながら、これから立ち上がるいろんな壁を乗り越えていきたいと思いました。

「ピースメッセンジャー」 山本さん

私はピースメッセンジャーに取り組んで様々な感動を体験しました。まず、平和について考え、意見交流するという事業を成しとげることに壮大な意味があると考えていました。実際に被爆された方のお話を聞いて、悲惨な事実が心が痛みましたが、今でも被爆者の方が、平和のため核兵器根絶のために活動し、闘っていることに強く心が動かされたのを覚えています。そして私ももっと平和について考えたいと思いました。きっとまだまだ平和に程遠いけれど、心が動かされたことは忘れず、全員で闘うべきだと思います。平和という言葉を強く意識した夏休みでした。それが平和につながることを願っています。

無題

脇さん

夏休み中にある小説を読みました。

それぞれ孤独を抱える高校生5人が絆を深めていく物語です。その中に、「空はひとつしかないけど、ずっと遠くまで広がっている。地球を一周して、私たちの頭上でつながっている。」という言葉があり、印象に残りました。

コロナ禍で人とのつながりを感じにくく、寂しいなってしまうことも多いと思います。この言葉には「誰も一人ではない、みんなが空の下でつながっている。」という意味が込められているのではないかと思います。「空はひとつしかない」から、みんな同じ空を見て、同じ空の下を生活しているのだなと実感し、感動しました。大変な状況だからこそ、この言葉を多くの人が受け取ってほしいし、どんな時でもみんなとつながっているのだということを忘れずにいたいなと思いました。

※実は、あと20編ほど紹介したい作品がありました。掲載できなくてごめんなさい！

「広島平和記念事業に参加して」 釜石さん

コロナ禍で広島へは行くことができませんでしたが、オンラインで、広島で3歳の頃に被爆された方のお話を伺うことができました。人は焼けただけ食べ物はなく、焼け野原の中、家族を捜し…。きのご雲の下の話はとても悲惨なものでした。3歳の頃の体験とは思えないほど、話の内容が鮮明でした。それほど大きく恐ろしい出来事だったのだと思います。それをずっと伝え続けたということは本当にすごいことだと思いました。

原爆については、教科書でも時々出てきていましたが、実際に被爆者の方からお話を伺うのは初めてでした。私は過去に広島へ行ったことがありますが、その時は怖くて資料館に入ることができませんでした。だから、コロナが収まったら、資料館へ行ってもう一度そのことについて、もっと知ろうと思いました。

講話の後、平和のためにできることについて、グループで意見交流をしました。今も、戦争は世界で起こっています。私たちのグループの意見は、今回学んだことを「みんなに伝える」ことでした。一人一人の力が小さくても、仲間やそのまた仲間が「ピースメッセンジャー」になったなら、きっと世界を大きく変えることができるはずです。

私は皆さんに伝えようと、ここに「広島平和記念事業」のことを書きました。今回学んだことは絶対に忘れずに、周りの人と平和について考え、積極的に話していきたいです。



「7月29日の選抜陸上」 野呂さん

この日は僕にとってプレッシャーに押しつぶされそうになった日です。この大会は全中出場をかけたラストチャンスで朝はとても憂うつでした。刻々と競技時刻は迫って、本当に心が折れかけていました。棒高跳びの標準は4m00で、試合では1回しか跳んだことがありませんでした。3m80をクリアし、バーの高さは4m00に。とても緊張し胸が張り裂けそうでした。

そして僕の番がやってきて1回目の跳躍の結果は失敗でした。頭は真っ白で本当に苦しい気持ちでテントに入りました。周りは4m00を1回で跳んでいく。さらにプレッシャーになりました。そして心を整えて迎えた2回目。走り出してポールがボックスにささり、空中動作に入る。ここで僕は斜めに跳んでいると感じ、また失敗だと思いました。しかし、マットに落ちると同時に聞こえた歓声。驚き、バーを見ると4m00にかかっていたままでした。驚きと同時に一気にうれしい感情が飛び出てきました。そして不思議と空に手を掲げ、ガッツポーズをしていました。

「コンクール」 室谷さん

私たち吹奏楽部は8月3日に行われたコンクールに出場しました。私は1年生の時に家の用事で会場に行けず、先輩たちの演奏姿を見ることができませんでした。2年生の時は新型コロナウイルスの影響でコンクールが中止になりました。今回のコンクールは自分にとっては最初で最後でした。舞台までの移動中に私たちのために動いてくださっている人をたくさん見ました。コロナ禍の今、コンクールに出場できることに感謝しなければいけないなと思いました。結果は金賞には届かず銀賞だったけど、自分たちのために動いてくださったたくさんの方のおかげでできたコンクールは感動しました。3年生はコンクールはもうありませんが、次の演奏の機会があればこの経験を生かして演奏しようと思いました。

「おおばあちゃんのお盆」 中山さん

今年はおおばあちゃんが亡くなって初めてのお盆でした。コロナの影響もあり、お葬式に行くことはできませんでした。親戚が多いのでたくさんの方が家に来てくれました。多くの方が念仏を唱えてくれました。お昼ご飯を食べ、時間はすぐに過ぎていき、お盆休みが終わりました。その夜、静かな仏壇の前に座っていました。線香に火を灯してしばらく合掌して目を閉じました。静かな中でおおばあちゃんとの思い出を振り返っていました。いつも応援してくれていたおばあちゃんが目に浮かんできました。その時、おばあちゃんが「がんばれ、結斗くんならできる」と応援してしてくれたことを思い出しました。次の日、母と真剣に受験についての話をしました。その時母は「がんばれ、結斗ならできる。」と言いました。おばあちゃんのこともあり、この応援は僕の心を大きく動かしました。

「感動を与え感動をもらう」 平松さん

～気合十分で真っ暗なステージのセンターへ行きました。音楽が鳴り、灯りがついて顔を上げたその先にはカメラを持っている観客のみなさんがこっちを見ていました。正直、私はもう何も感じないくらい楽しかったです。練習では失敗したらどうしようとか不安でたまらなかったのに、そんなのどうでもいいと思えました。コロナ禍でこれまで見られなかった観客の皆さんの前で踊れることがとても楽しくて、踊る環境があることが嬉しくて、そしてこの私たちのダンスを届けたくて。勝手に動く体、もう本能に従って踊りきりました。その時の私の頭の中には「感謝と感動」しかなかったです。このメンバーでこのナンバーを踊るのはその日がラストで悲しかったけど、笑顔が勝っていました。（長文を抜粋させてもらいました。）

※事実とともに自分の思いや考えがしっかりと書かれている作品ばかりでした。お見事！